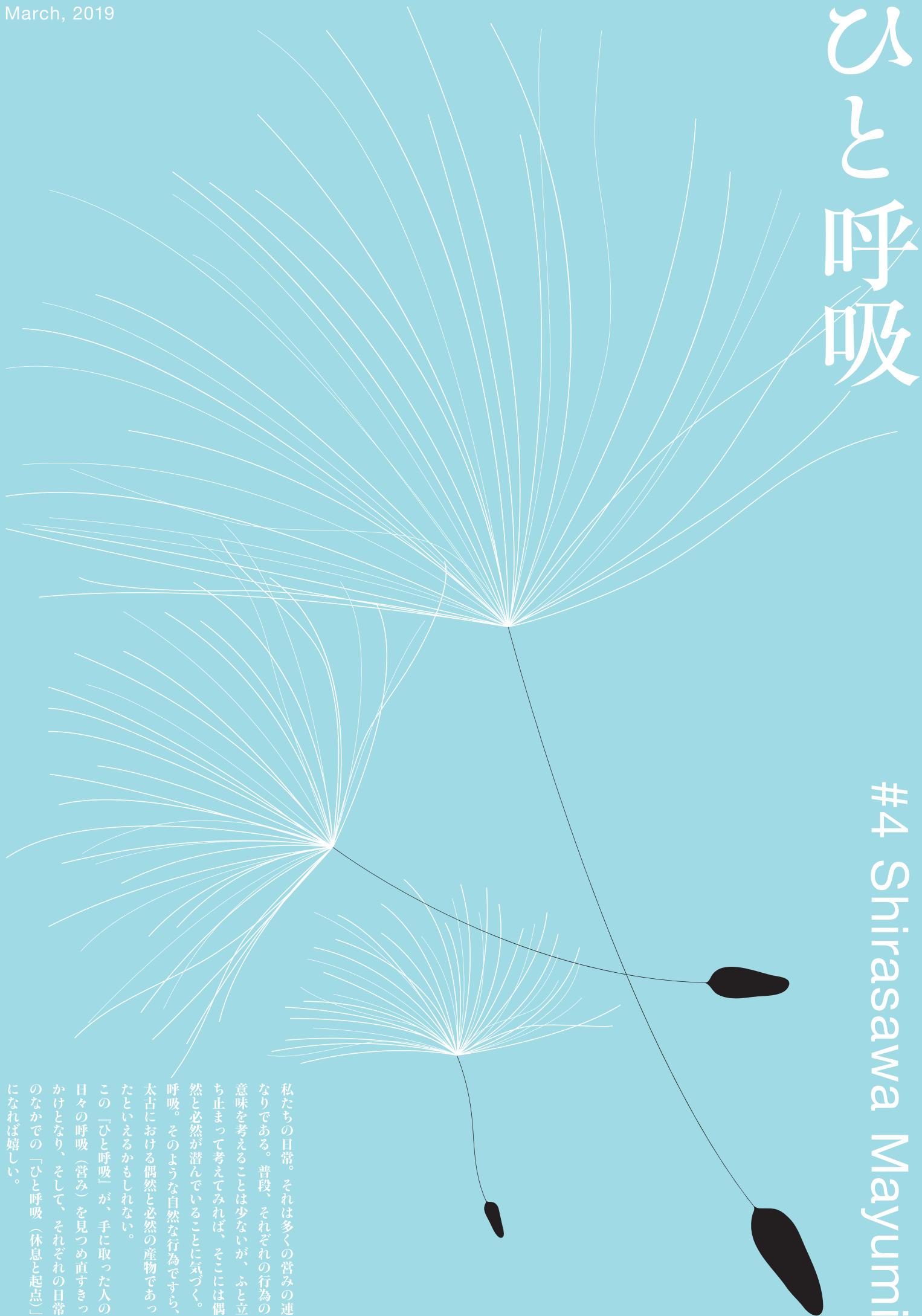


# ひと呼吸

#4 Shirasawa Mayumi

March, 2019



私たちの日常。それは多くの営みの連なりである。普段、それぞれの行為の意味を考えることは少ないが、ふと立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必然が潜んでいることに気づく。呼吸。そのような自然な行為ですら、太古における偶然と必然の産物であったといえるかもしれない。

この「ひと呼吸」が、手に取った人の日々の呼吸（營み）を見つめ直すきっかけとなり、そして、それぞれの日常のなかでの「ひと呼吸（休息と起點）」になれば嬉しい。

# #4 Shirasawa Mayumi

Interviewer / Text Funakoshi Koju

大学時代から  
これしかしてこなかつた

ことなのかな。  
船越 第二波という感じでしようか。

船越 ゼひ長いバージョンで（笑）。

白澤 そうですね。これまで支援に取り組めなかつた大学もやつと動きだしてくれた感じです。さすがにやらざるをえなくなってきたのかもしません。

船越 先生はその第一波の段階から障害学生支援に関わっていますが、この分野に関わるきっかけとなる原初的な体験はどこにありますか？

白澤 「聴覚障害学生支援の専門で、特に情報保障について研究をしています」という言葉をしますね。場合によっては、手話通訳士とか筑波技術大学の准教授だと言いますけど。それに加えて、「聴覚障害学生を受け入れている大学をサポートするために、全国行脚する毎日です」とお話しすることもあります。

船越 全国を回られていると、行けば行くほど課題が見えてきませんか。

白澤 そうですね。最近は、むしろ一昔前のお話をさせていただく機会が増えた感じがします。一時期は障害者差別解消法の話ばかりで、どこに行つても同じようなテーマで依頼をいただいていたんですけど、最近は一周回つてだいぶ前のスライドを使用して、「聴覚障害って何？」とか「聴覚障害学生を受け入れたら授業ではどんな配慮をしたらいいか？」みたいな話をすることが増えました。改めて、きちんと支援を始めるんですけど、そういう大学が増えたんですね。裾野が拡がってきたという

白澤 おもしろいですね。なぜ道德だったんですか？  
船越 大学ではどのようなことを学ばれていますか。  
白澤 やはり「人の役に立ちたい」とか、「役に立てるような子どもたちを育てたい」みたいな幻想があつたんですよ。「役に立つ」っていうことがどういうことかもわからないまま勝手なイメージを思い描いていたんだと思います。それが、先ほどの話でガラガラと崩れ去った。でも、聞こえる人の体の中には、それでも崩れずに残っているエゴみたいなのが染み付いているんですよね。だから、ろうの人たちと本当の意味で出会つてからの日々は、その残りのかけらを捨て去つていく日々でした。心に残つた「健常者」としてのエゴをえぐり取るような。  
白澤 話し辛いかもしれないですが、えぐり取つた部分つてどんな部分だったんでしょう

白澤 おもろいですね。なぜ道德だったんだと思います。自分が思つたとおりの世界にいると、ある程度理解したと思つても、思えば思はうほど、ろうの人たちから「お前はまだまだわかっていない」と突き放されるかのような瞬間つてあるわけですよ。「やつと近づけた」つて思つた瞬間に、まだまだだと突きつけられる。先日、松崎丈先生<sup>2</sup>や吉川あゆみさん<sup>3</sup>と話をしていた時に「聞こえる人にとっては、ろう者との関係つて永遠なんだよね」つて話をしたんですね。そしたら二人が「でも、逆もそうじゃない？」つて言つたんです。それを聞いた瞬間に、「あ～そっか、そうだよね」つて心を打たれました。ろう者からすると、聞こえる友達との関係つて本当に永遠で、やつと自分のことをわかつてくれたと思った瞬間に、目の前で、手を動かさずに話されたりするんだそれです。自分には直接関係のない会話だから仕方ないと思いつつ、自分にとって「わから

い言葉だつたんですが、全然わからず、もう一回聞いてもまだわからなかつたので、「ごめん、声出して」つて言つたんですよ。そしたら、その学生がちょっと考えて、指文字で何か言つたんです。それもわからなくて困つていたら、仕方ないなあという様子で紙に一言書いてくれたんです。それが「ろうのプライド」っていう言葉で。

ろう文化の話つて、ご存知の方もいらつしやると思うのですが、ろうの子どもたちつて小さい頃から「声を出す」という行為を教えられますよね。あれつて、ろう文化の中では、聞こえる人の世界に自分を合わせる行為と捉えられていて、聞こえる世界からの抑圧の象徴と考えられることがあるんです。ろう学生の集いというのは、まさに今まで聞こえる世界にいて、ずっと声を出していた学生が、自分には手話があるんだ、これが自分の生き方なんだつて発見する場で、だからこそみんな声を出すのをやめて、手話だけで話をしたりするんですね。だから「ろうのプライド」っていうのは、自分は自分らしく生きたいから声は出さないって意味だつたんですが。

そんな彼らの気持ちに一つも思いを馳せないまま、ただ何も考えずに「声を出して」つてお願いした自分に対して、ものすごく情けなくつて、大変なショックを受けました。自分は何を考えて手話を勉強したいと思つたんだろうつて思つたし、良いことをしたい、人の手伝いをしたいと思つていたけれど、こんな不快な思いをさせているようでは支援なんができるわけないつて思つたんですよね。

それで自分が思つていた「良いことするひと像」みたいなものがカラガラと音を立てて崩れ、今まで勝手に積み重ねてきた価値観では思つてゐるのかを学ぼうつて思つたんです。聞こえない人がこの世界をどう見て、どんな生き方をしているのか知りたいと。そして、



白澤麻弓・しらさわまゆみ

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター准教授  
2004年に全国の高等教育機関で学ぶ聴覚障害学生の支援のためのネットワーク「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PHPNet-Japan)」の立ち上げに尽力し、現在事務局長。

『心身障害学』、手話通訳士。著書に『海の向こうに行つたら日本が見えなった米国先進大学に学ぶ聴覚障害学生支援に関する検討会』委員。博士(心身障害学)、手話通訳士。著書に『海の向こうに行つたら日本が見えなった米国先進大学に学ぶ聴覚障害学生支援』デザインエッジ社。(2001年)など。

船越 よろしくお願ひします。最初に共通して聞いているのですが、自己紹介をされると、どんな風にされていますか。

白澤 「聴覚障害学生支援の専門で、特に情報保障について研究をしています」という言葉をしますね。場合によつては、手話通訳士とか筑波技術大学の准教授だと言いますけど。それに加えて、「聴覚障害学生を受け入れている大学をサポートするために、全国行脚する毎日です」とお話しすることもあります。

船越 全国を回られていると、行けば行くほど課題が見えてきませんか。

白澤 そうですね。最近は、むしろ一昔前のお話をさせていただく機会が増えた感じがします。一時期は障害者差別解消法の話ばかりで、どこに行つても同じようなテーマで依頼をいただいていたんですけど、最近は一周回つてだいぶ前のスライドを使用して、「聴覚障害って何？」とか「聴覚障害学生を受け入れたら授業ではどんな配慮をしたらいいか？」みたいな話をすることが増えました。改めて、きちんと支援を始めるんですけど、そういう大学が増えたんですね。裾野が拡がってきたという



船越 よろしくお願ひします。最初に共通して聞いているのですが、自己紹介をされると、どんな風にされていますか。

白澤 「聴覚障害学生支援の専門で、特に情報保障について研究をしています」という言葉をしますね。場合によつては、手話通訳士とか筑波技術大学の准教授だと言いますけど。それに加えて、「聴覚障害学生を受け入れている大学をサポートするために、全国行脚する毎日です」とお話しすることもあります。

船越 全国を回られていると、行けば行くほど課題が見えてきませんか。

白澤 そうですね。最近は、むしろ一昔前のお話をさせていただく機会が増えた感じがします。一時期は障害者差別解消法の話ばかりで、どこに行つても同じようなテーマで依頼をいただいていたんですけど、最近は一周回つてだいぶ前のスライドを使用して、「聴覚障害って何？」とか「聴覚障害学生を受け入れたら授業ではどんな配慮をしたらいいか？」みたいな話をすることが増えました。改めて、きちんと支援を始めるんですけど、そういう大学が増えたんですね。裾野が拡がってきたという

白澤 おもしろいですね。なぜ道德だったんですか？  
船越 大学ではどのようなことを学ばれていますか。  
白澤 人間学類と言つて、教育と心理と心身障害学のいずれかを選択できるコースにいました。もともとは教師になるために生まれきたんだつて思つていたのですが（笑）、2年次の初めのコース選択でいろいろ迷つて、結局、心身障害学に行きました。  
船越 その通り教師になつてしまつたら何の先生になつっていた可能性が高いですか。  
白澤 道徳です。いやな先生ですよね。アグgressive（笑）。  
船越 おもしろいですね。なぜ道德だったんですか。

白澤 やはり「人の役に立ちたい」とか、「役に立てるような子どもたちを育てたい」みたいな幻想があつたんですよ。「役に立つ」っていうことがどういうことかもわからぬまま勝手なイメージを思い描いていたんだと思います。それが、先ほどの話でガラガラと崩れ去つた。でも、聞こえる人の体の中には、それでも崩れずに残つてゐるエゴみたいなのが染み付いているんですね。だから、ろうの人たちと本当の意味で出会つてから日々は、その残りのかけらを捨て去つていく日々でした。心に残つた「健常者」としてのエゴをえぐり取るような。

白澤 話し辛いかもしれないですが、えぐり取つた部分つてどんな部分だったんでしょう

白澤 いっぱいありますよ。すぐに良い例が

白澤 では……。それで、とにかく手話を覚えたなきやつて一生懸命手話サークルに通つていたんですけど、そんな時に先輩から夏に全国の集い<sup>1</sup>があることを聞きました。今でも続いている会で、ろうの学生が毎年一回集まる三泊四日の合宿です。それが実家の近くで開催されるというので、私も参加しました。後にもう一つはアイデンティティを発見する場所で、多くの学生がわずか数日間で生まれ変わる体験をする、そういう場なんですね。そこへ、入学してから四ヶ月で、自己紹介程度の手話しかできない状態で行つたんですね。それでも、最初のうちはみんな優しくて、手話ができない私に対して声を出してくれたりに知つたのですが、この合宿は、ろうの学生たちにとってはアイデンティティを発見する場所で、多くの学生がわざか数日間で生まれ変わつて、教室の前方で手話通訳をしてる先輩がいたんです。手話サークルの先輩だつたんですけど、それを見て、「すごい！」あれやりたい！ って思つて。良いことができるし、みんなの注目を集めると、手話通訳つてすごいじゃありませんか。大教室で皆に向かつて全員で良いことができるというので、「かつっこいい！」つて思つて手話を始めたのがきつかけてです。まあ、でも実際にろうの人たちと話をするようになって、彼らが聞こえないといふだけで授業に参加できない現状が許せなくて、それでなんとかしたいと思つたのが今につながつてゐるわけですが。ここから長いバージョンヒ短いバージョンと分かれるん



## Editor's Note

白澤さんを訪ねて筑波技術大学に伺った日は、筑波山の稜線がきれいに見える秋晴れの日でした。大きな吹き抜けを挟んでも、向こうこちら、手話で会話ができるようにと、大きくガラス張りにされた校舎に降り注ぐ陽光がとても心地よかったです。

誰もが世の中の矛盾や理不尽を感じつつ、でもどこなくあきらめてしまい、心の距離を置くのに慣れたかのように冷めてしまっているのが最近の風潮です。その中においても、「これ許せないでしょ」「こんな状態を放置してもいいのか」「おかしいじゃないか」「どうにかしてこの状況を変えなきゃ」と声を上げ、でも批判や論評をするだけではなく、その理不尽さを吹き飛ばしていくための仕組み作りをちゃんと進められる人に、ボクは職業人としての魅力を強く感じます。それをスマートにできている人にはなおさら。白澤さんはそんな魅力あふれる「人」の一人です。

だからでしょうか、インタビューの文字起こし原稿が手元に届いた時、その分量の多さにびっくりしました。たくさんお話をいただいたのに、ここに掲載できたのはごく一部です。残りの部分は将来絶対に書いていただきたい自叙伝のために取っておきますね。

(船越高樹)

## Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積してきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えていく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながる考え方、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会（HEAP×Kyoto Univ.DSO）

村田淳、船越高樹、宮谷祐史、木谷恵

HEAP：高等教育アクセシビリティプラットフォーム

Kyoto Univ.DSO：京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援センター内

Web <https://www.gssc.kyoto-u.ac.jp/platform/>

Mail d-support-pfm@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707